長谷の觀音を信仰し、その身一期の安樂を願ひ奉れ』と遺言してついに空しくなりしかば、培子の泣く〳〵野邊の送りをすませ、その後月毎に長谷寺に參り、親の讓りの鏡に

哀れとも佛こそ見め十寸鏡
うき面影の底にうつるを

と云へる一首の歌をそへて賓前に納めけるとぞ。

幾美女が事。

きみ女の備後の國の人なり、年十四、母に從つて山に薪を採り居たり、會々一頭の狼牙を鳴し爪を恐らして突き到れり母驚き遁れんとし過つて地に仆る、狼躍つてその上に飛び上り坐す、きみ女之を見て急に抗を拔き、力を極めて ろの脊を擊つ、狼頭轉して傍らなる溪間の中に墜つ、きみ女乃ち水を掬して母に含ませ、氣息漸く蘇生するに至る是に於て扶掖して家に歸り、具さに事の始終を里人に告ぐ、里人之を聞き槍を提げて溪間に別け入る、忽ち荊棘中に咋々として響きをなすものあるを聞き、就て之を見れば一老狼の脊梁碎けて起つこと能はず、蛇行して去らんと欲するなり、里人便ち刺して之を殺す、是より幾美女が勇名四方に高し。

山路が事。

松平周防守の奥に局役を勤むるものに瀧野といふ女あり、その婢を山路といふ、年僅かに十四、性質温和にして利發なり、或時中老某、瀧野が少しの過ちせしを咎め、太く罵り辱し